

グリーンサムバイカイメン

ISSUE 01



SPRING, 2021

KEIMEN

KEIMEN : 発芽

KEIMEN (カイメン) とは、ドイツ語で発芽の意味。タネはそのものだけでは何も起こらない。土、水、光。自分以外の何かと出会い、発芽する。何かと共鳴して生きる。それは人間も植物も同じかもしれない。農という営みを通して、知識や思想、人や歴史を発見すること。KEIMEN が、あたなが新しい出会いと共鳴するきっかけになればと思う。



Photography
Shu Kojima



05

家を出た時から、僕たちの芸術は始まる。

Vest, Long Tshirt, Pants, Grove by KEIMEN





Vest, Thermal, Pants by KEIMEN





L : Long Tshirt. Pants by KEIMEN
R : Grove by KEIMEN







通算 15256 回。

今朝も、もちろん野糞しました。

―身勝手というのは、どういうことですか？

し尿処理場が臭くて汚いと思うのも確かにわかります。だけど、処理場で何をやっているかというところ、自分たちのウンコの処理ですよ。自分で汚いウンコを出しておいて、処理場は嫌だから遠ざける。一体これはなんなんだと。しかも、自分がそれまでトイレにきてきたウンコも、みんなが嫌がる処理場のお世話になっていているわけです。これはマズイぞと。

―それまでも伊沢さんは自然保護運動に関わってきたんですよね。もともと自然環境に関する問題意識は高かったわけですね。

そうですね、野糞の前から自然保護運動をやってきましたし、人間は自然から資源やエネルギーを奪うばかりで、自然に何もやってないと。そういう思いを感じていたんです。ところが野糞をして菌類に分解してもらえば自然も豊かになるし、処理場のお世話にもならないから、人に迷惑もかけない。これは一石二鳥だということ、1974年の1月1日に信念を持って野糞を始めた。何かを始めるには正月ってキリがいいですから。ハハハ。

―最初にした野糞ってどんな感じでしたか？

田舎暮らしですから、野糞する場所は不自由しないですからね。スコップ持って裏山行って穴を掘って、野糞しました。その時は義務感というか責任感からやっていたというのは強いです。とにかくトイレにウンコをしちゃうと、みんなが嫌がる処理場に行くからマズイですよ。それをやっちゃいけないぞと。

―1974年の1月1日が初野糞。それ以来トイレは使っていないんですか？

そんなこと無いですが、1980年以降は下痢などの緊急事態以外は使っていません。そして13年と45日という連続野糞記録もあるんですよ。今朝ももちろんやってみますけど……ちょっと待ってください（手帳を取りに行く）、ええと今日で15256回ですね。基



食は権利、ウンコは責任、 野糞は命の返しかた。

本的に1日1回、47年以上かけてこの数字です。

—すごい数ですね…えっと、最終的には土と循環の話に向かっけいきたいんですけど、もう少し野糞について教えてください。そもそも野糞、やったことないっていう人も結構いると思うんです。

そうですね、その方が遙かに多いですよ。

—じゃあ野糞ってそもそもどうやるの？ 快適なの？ っていう。

野糞って聞くと、ほとんどの人は汚らしい、はしたないというイメージですよ。だから私は、正しい野糞のしかたっていうのを、やっているんですよ。昨日も亀有のお寺で講演してきてね、こういうものがあるんです(掛け軸のような布を取り出し、読みあげる)。「場所選び、穴掘り葉で拭き、水仕上げ、埋めて目印、年に1回」。

—それ写真撮ってもいいですか。

どうぞどうぞ。みんな野糞と聞いてイメージするのは、出したら出しっぱなしですよ。すると踏んづけたりして汚らしい。ですから必ず穴を掘る。紙は分解されにくいので葉っぱで拭きます。人の家の玄関先とか水源地の近くや、高山帯など分解力の弱いところは避けましょうと。ウォシュレット、使ったことありますか？

—ウォシュレット、あります。すっきりして気持ちいいですよ。

紙で拭くだけより遥かに綺麗になりますね。でもウォシュレットはけっこうたくさんの水を使う。私はなんと、1回の野糞で30〜40ccしか使いません。どうするかというと、葉っぱで拭いたあとにちよつと濡らした指で肛門をぬぐって指を洗い、それを何度か繰り返す。水の膜があるから手にウンコがつかないわけです。



野糞をするたびに

「ああ、俺は生きてていいんだ」
と思うわけです。

―1年に1回って言うのは？

ウンコは栄養豊富だから、同じ場所に続けて野糞すると土が富栄養化しちゃうんです。だから分解したウンコの養分を植物が吸収するまで1年は間を開ける。人工的なものも使わないし、自然への悪影響も無い。正しい野糞はいいことだらけですよ。

―野糞を始めてから変わったことって何ですか？

その前に、「食は権利、ウンコは責任、野糞は命の返しかた」という「糞土思想」の説明をします。

―おねがいます！

まずね、人間は自分で栄養をつくれなから、生きるには食べるしかない。食べるってことは、動植物の命を奪う残酷なことだけど、生きる権利です。そして食べるって汚いウンコが出ますね。だからご馳走を汚物に変えたことと、命を奪った責任のかたまりがウンコなんです。でも野糞をすれば、その責任を果たすことができるんですよ。奪った命を返すことができる。だから野糞をするたびに「ああ、俺は生きてていいんだ」と思うわけです。野糞のために毎日野山を歩くので肉体的にもいいですからね。野糞健康法です、ハハハ。



つきつき飛び出す刺激的なウンコ話は尽きないけど、そろそろ農についても聞いてみようと思う。KEMENZは服やギアを通して農の魅力を伝え、土や自然へ関心を持つきっかけを作りたいと思っている。畑や農は、糞土思想ではどんなふうに見えるのだろうか？

―農業についてはどう考えていますか？

農業はね、人間の労働もあるけど、自然の恩恵を受けているでしょう。以前、講演会で有機農業をやっている人から「ウンコは優れた肥料になるのに、野糞しちゃうともったいない」と批判されました。結局ね、



農業は小乗仏教、野糞は大乗仏教です。

食べて命を奪うだけで無く、ウンコになっても自分たちのために使うことしか考えていない。野糞っていうのは、自然全体を豊かにするんです。人間だけじゃなくってね。仏教でいえば、農業は小乗仏教、野糞は大乗仏教です。農業からさらに、うんと自然の方に突き進んだのが糞土思想だと、そう言っちゃっていいんじゃないですか。

— KEIMEN のメンバーも畑をやっているんですけど、畑ってある意味で不自然な場所だっていうのは、よくわかるんです。何百株ものナスが一斉に実るみたいなことって。

多くの人間を養うために、効率を求めるのはしょうがないといえば、しょうがないです。狩猟採集生活で、自然全体からおこぼれをいただくみたいな感じならいいんですけど、現実的にはちよつと無理ですね、これだけ人口が増えると。

— アスファルトで覆われた都市で育つと、土が汚いというイメージを持ったまま大人になる人も多いです。でも、畑で土を触ることは、その感覚が変わるきっかけになると思うんです。そうした思いから KEIMEN は始まっています。

例えば野菜クズとか切った爪とかのゴミが出たら、私は庭の土にばら撒きます。土の中には有機物を分解する多くの微生物がいて、ちゃんと大地の栄養にしてくれるんですよ。私たち人間がいなくなつたものを、新しい命に蘇らせてくれるんです。コンクリートではそうはいきません。そのことを忘れて、土は汚ないというのはね、とんでもないですよ。

— そう考えると、ウンコと土って似ていますね。

似ているどころか、命を蘇らせる大切なものとして、ほとんど同じですよ。

— 虫が気持ち悪いかもそうですけど、都市はウンコや土を汚いものとして、見えないところへ隠しながら進んできたのかもしれない。



コマーシャルにのせられて、
恩人を殺しまくっている。
それが現代の私たちの生活です。

うん、あとはね、やっぱりコマーシャルイズム。例えばね、野糞した時に下を見るでしょう。すると、すでにハエがウジを産み付けているんですよ。あつというまです。ハエにとってウンコはごちそうですから。でも、汚い虫でいい方がいいから殺虫剤を撒いて殺しましようよ、CMやってますね。それで儲けている企業がたくさんある。でも、本当はハエが汚いんじゃない。汚いのは自分のウンコ。逆なんです。コマーシャルにのせられて、自分が出した汚いウンコを食べて始末してくれる恩人を殺しまくっている。それが現代の私たちの生活です。

—そう考えるとかなりアンバランスというか。

私に言わせるとアンバランスどころか狂っていますよ。それを解決するきっかけとして、もちろん農業も大事です。それから、野糞から見えてくる自然の循環。農と野糞、両方やればちゃんと理解できるはずですよ。

—なるほど。野糞は農のさらに先にありますね…：糞土思想は、社会の行き詰まりに対して生まれた現代のカウンターカルチャーという感じもします。

気候変動とか、課題がもう見えているわけですよ。人間が奪い続けてきて、自然が疲弊していることが。じゃあ、どうすれば持続可能な世界に戻せるかということ、自然と人間がお互いを生かしあう共生関係にいかないとだめです。これからは生産性なんていうプラスをやる必要はありません。むしろ自然に対して今までマイナスをやり続けてきたのを、せめてゼロに戻そうと。それが野糞のできるから、やっているんです。

—ウンコの話が、これからの生き方につながるわけですね。自然のために野糞しようというのは、かなり尖った提言です。

ウンコを通して、人間がいかに自分の利益しか考えなかったかが見えるんですよ。尖って感じるかもしれないが、ぜんぜん。謙虚ですよ。むしろ今の資本主義の社会の方が危険に尖っています。それが当たり前前に



上辺だけで考えると ウンコも土も汚いものだと思ってしまう。

なっちゃったから、私がやっていることが尖って見えるだけです。じゃあね、ウンコって一言でどう表現しますか？

ーうわ、難しい。なんだろう、自分の中身を見せる恥ずかしさがあるかもしれません。

ふふふ、そうなりますよね。ウンコって聞くと、みんな人間や動物のウンコしか考えませんよね。私が一言で表現するならば、食べ物を消化吸収した後の残りカス。そう考えると、酸素は植物のウンコですよ。光合成での、CO₂と太陽光と水という食べ物のあまりカスが酸素ですから。そして植物のウンコがすべての生き物の呼吸を可能にしているんです。

ーということは、僕たちもウンコを食べて生きている……。

そうですね。植物だって菌類だってウンコをするんです。そのいらなくなったカスが、次の生き物の食べ物になる。それが循環です。これからのキーワードは循環と共生でしょう。自然界の生き物は循環しながら、支え合っているんです。その鍵が食べ物でありウンコ。地球上の命って、みんなウンコで成り立っているんですよ。だから私はこう言うんです。人がつくり出す最も価値あるもの、それはウンコ。人間が行いうる最も崇高な行為、それは野糞。野糞以上に自然に命を還す行為はないんだと。

ーうーん、これまでウンコについていかに考えが浅かったか。思い知らされました。

目からウンコですね、ハハハ。私はね、いかにウンコを楽しむかをやっているんです。今、糞土塾の開設準備で古民家を改修し、プーランドという林も整備中です。野糞天国ですから、みなさん連れて野糞しに来てください。

ープーランド、行きたい……！最後に若い世代へメッセージをいただけますか。



農ってというのは、 循環と共生を考えるスタートライン。

地球上のすべての生き物の命の根元は太陽の光エネルギーですよね。私たちがキャッチできない光エネルギーを植物が捕らえて、有機物と酸素を作ってくれます。焚き火をして暖かいのも植物が取り込んだ太陽エネルギーを木の中に閉じ込めて、それが燃えているんです。だから、炎の暖かさは何年も前に地球に届いた太陽の暖かさ。ちよつとロマンチックでしょう。そうして考えていくと、本当は何に価値があるのか見えてくるはずですよ。上辺だけで考えるとウンコも土も、ただの汚いものだと思ってしまうけど、根本まで考えることが大切です。そういう意味でも、農ってというのは、循環と共生を考えるスタートラインとして、とてもいいと思いますよ。



こんなにウンコを連呼したのは小学生以来かもしれない。さらに深いウンコの話は、伊沢さんの近書『ウンコロジャー入門』を参照されたい。伊沢さんの話を聞いて、僕たちはおだやかな火を囲むみたいなたかい気持ちになった。まずは自分のウンコから目を背けないこと。そして本当は何が汚くて何が美しいのか、畑で土を触りながら考えなおしてみたい。

伊沢正名（いざわ・まさな）

●糞土研究会 <http://nogusophia.com>

●糞土師の対談ふんだん <http://taidanfundan.com>

Vest, Wristband by KEIMEN





Hat, Vest, Thermal by KEIMEN



君も毎日、ちいさな火を炊いている。





28

土がとれただけおしゃべりか。



Tshirt, Pants by KEIMEN





30 僕たちは地下の王国で手を繋ぐ。



Vest, Pants by KEIMEN







Vest (ivory) ¥13,860
 Pants (ivory) ¥18,000
 LongTshirt (ivory) ¥11,000
 Grove (khaki) ¥1,680



Vest (black) ¥13,860
 Thermal (black) ¥12,800
 Pants (black) ¥18,000



LongTshirt (ivory) ¥11,000
 Pants (ivory) ¥18,000



Hat (brown) ¥8,500
 Thermal (khaki) ¥12,800
 Pants (khaki) ¥18,000



Vest (light blue) ¥13,860
 Wristband (black) ¥1,850



Hat (black) ¥8,500
 Vest (charcoal gray) ¥13,860
 LongTshirt (black) ¥11,000



Tshirt (ivory) ¥9,200
 Pants (beige) ¥18,000



Vest (ivory) ¥13,860
 Pants (black) ¥18,000

CONTRIBUTORS

Shu Kojima Photographer

企画から撮影・編集まで、すべてひとりで行う写真・映像作家。山奥のボツンと一軒家で暮らしながら様々な挑戦のビジュアル面を担う。

<https://www.shukojima.com>

内田 牧人 Model

VELBED. 所属。

<https://www.velbed.jp/makito-uchida>

Toru Nagoshi Stylist

1983年生まれ。2009年スタイリストとして独立。2011年渡米。free stylist、free stylist assistant を通して、magazine や adverting、campaign、lookbook などの製作を学ぶ。また shop の VMD に興味を持ち、window display や pop up event display も担当する。2015年帰国。広告、ブランドやテキスタイルメーカーのコンサルタントなどで活動。

<https://www.torunagoshi.com>

伊沢正名 Fundoshi

1950年茨城県生まれ。1950年、茨城県生まれ。1970年より自然保護運動をはじめ、1975年から独学でキノコ写真家の道を歩む。1974年よりノグソをはじめ、1990年には伊沢流インド式ノグソ法を確立。1999年には年間野糞率100%を達成。2006年に糞土研究会を設立。講演や執筆などに取り組む。各界の方々と糞土思想や「しあわせな死」を語り合うWebコンテンツ「糞土師の対談ふんだん」を更新中。著書多数。

<http://nogusophia.com>

青木農園 Farmer

神奈川県三浦半島、目の前に海が広がる地で作られる三浦野菜は、レストランや百貨店などのファンも多い。

<http://aokinouen.com>

GREEN THUMB by KEIMEN

issue01 Spring, 2021

Words & Editing : MASAYA YAMAWAKA

Design : MASAYA YAMAWAKA

Director : Shogo (VELBED.)

Producer : YUYA IROKAWA

Print : HAKKOU BIJUTSU

Printed in Japan 2021

©KEIMEN All rights reserved.

発行：株式会社キュー

東京都渋谷区代官山町 12-18

Tel 03-6804-2695

<https://daikanyamaseikaten.jp>

